

大川先生へのレクイエム

外国語部部長

石原孝哉

大川先生に初めてお目にかかったのは、大学紛争の余韻も冷めやらぬ昭和46年のことであった。当時新米教師であった私は、山県敏夫先生に紹介されて、新進気鋭の大川講師に会った。

当時は現在の第2研究館のところに野球部の合宿所があったが、大所帯になった野球部が学外に出て、その後が教員の研究室として使われていた。というわけで、研究館とは名ばかり、洗濯場や寮母室もそのままのみすぼらしい建物で、その中で一番威張っていたのは寮母さんが飼っていた猫であった。その寮母さんが出て、比較的に広いその部屋を中心に、山県先生など若手の英語教師が陣取っていた。大川先生の部屋は一階の中央にあり、新任の私はその部屋の一隅に机をおかせていただく光栄に浴したのである。

とはいえ個室ではなく、隣には清水先生の机もあったし、パネル一枚隔ててさらに3人の教師がたむろする、通称「タコ部屋」であった。外には「全学連」の学生のアジ演説とピッ、ピッという笛の音が聞こえるやかましい部屋であった。ここで先生は初対面の私にコーヒーを入れながら、いろいろなことを話して下さった。一番印象的だったのは、「意識」と「自意識」についての話で、このことについてはその後も、コーヒーを飲みながら何度かうかがった。しかし、先生のいう「この世の腐敗の原理としての自意識」についてはいまだによく解らない。

以来26年間、時はあっという間に流れていった。その間大川先生は、英語主任、外国語部長と要職を歴任されたが、先生の暖かいお人柄と、手際よい事務処理で、当時学生数2万人を超えていた駒沢大学の運営に支障がでることはなかった。日頃組織とか、議論などがお嫌いな大川先生の意外な一面であった。

だがひとたび役職を離れると、大川先生は相変わらず、わが道を歩き続けた。

個人的には、私は内心いつも大川先生を羨ましいと思っていた。自分の世界をもって、物に動じることなく、飄々と人生を楽しんでおられるようであったからである。先生は自由、良くはわからないけれども、独特の魂の解放といった自由を大切にされていた。そして先生はそれを圧殺したり、束縛したりするあらゆるもの嫌悪した。それは、ときに目にみえない潮流にのせて我々を押し流す社会であり、常識とか道徳という名のもとに個人を狭い枠の中に押し込める世間であり、民主主義という美名に隠れて、多数の原理で個人の尊厳を犯す現代社会でもあった。

さてこんな風に、ひたすらわが道を歩んできた大川先生であったが、昨年、最愛の奥様を亡くされてからは、人が変わったように元気を無くしてしまわれた。まるで生きる希望さえ無くしてしまったような憔悴ぶりであった。一緒に入試の仕事などをさせていただいたが、その落胆ぶりははたからみても気の毒なほどで、授業をされるのがやっとであった。

今年になって、やっと時々は笑顔を見せてくれるようになったのも束の間、4月には自身が入院することになってしまった。もっともこの時は、私たちは、先生がすぐにも教壇に戻られるものと思って、そんなに深刻には受けとめていなかった。病院でお会いしても、いつもの軽妙洒脱な冗談が返ってきて、誰もがその快復を疑わなかった。今になってみれば、すでにこの時病魔は先生の身体を犯し尽くしていたのだが、先生はいつものように文学談義をし、コーヒー談義に華を咲かせ、かえって、学部の雑事に追われる私の方を気遣ってくれるほどであった。

というわけで、先生の訃報をきいたときは、本当にわが耳を疑うほど驚いた。

ご遺志で葬儀、告別式はなさらないということもあって、今でも先生の死は実感として染み込んでこない。研究室の前を通るたびに、ほんのりコーヒーの香が漂い、中から先生がひょっこり顔を出すような錯覚に襲われる。

今ごろ先生は、あの世で最愛の奥様とともに、「自意識」のしがらみに捕ら

われた私たちを笑っているのかもしれない。

どうか安らかに眠り下さい。心よりご冥福をお祈りいたします。

大川浩先生を悼む

外国語部第一群主任

岡 崎 寿 一 郎

一九九七年八月十八日午前0時十分、大川浩先生が亡くなられました。六四歳でした。先生のご遺志で告別式は行われませんでした。先生は、D. H. ロレンスの研究一筋に歩まれた芯の強い学究であられたが、ご会いするときは、いつも笑顔で挨拶される温容の人でした。五月と六月に、東横線の武蔵小杉駅で下りて、日本医科大学附属第二病院の五階病室にお見舞に伺いました。その折、小柄なご身体がさらに細くなられたように思われたのですが、先生はいつものように微笑されて、お元気な声で話されました。その後、いったん退院され、ご電話もいただいたのですが、八月七日に再入院されたことは、十五日夜、清水祐次先生からのご電話ではじめて知りました。翌日、十六日の午後、急ぎかけつけた病室で先生のお顔を見たのが最後になりました。

先生は、旧英語科の主任を二期四年間、外国語部長を一期二年間務められました。私は、全学教授会委員として、先生に協力させていただきました。先生は、寡黙で、けっして自分を前面に出されることはなさらず、若輩の私の激しい物言いにも、黙って静かに聞き流されていました。いま思えば、無事に事を運ぶということの困難さを黙って実行されていたことに気づかされます。

先生に、はじめてお会いしたのは、二十数年前、耕雲館の横にあった木造の旧第一研究館の研究室でした。紺色の縞のワイシャツに、ネクタイをきちっと締められ、穏やかに微笑された瀟洒なご姿が忘れ難く思い出されます。

近年、圭角の多い私にも、とみに優しく接してくださり、「なかなか良い本

がなくて」と言って、子供たちに本（打木村治『天の園—雲の学校—』〈全六冊〉偕成社）を送っていただきました。謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

大川浩氏の死を悼む

吾 妻 雄 次 郎

大川先生が亡くなられて、かれこれ2カ月になろうとしている。夏のまだ暑さの厳しいころ、たまたま学内で会った同僚の英語の先生が、なにやら今でも六階の廊下を、盆にコーヒーカップを載せて、楚楚と小柄な体が動いて来そうな感じがするんですよと言った。その言葉にはいろいろな意味が込められているように思う。あんなに元気だった人が、いや元気そうに見えた人が、僅か2、3か月のあいだに亡くなられたと言うことへの驚愕、人間は心身の歯車が噛み合うところでは、驚くほどのしぶとさを持っていながら、けっして外的な力、不慮の出来事に巻き込まれた訳でもないのに、ただその成り行きを周囲の者に知らしめるどころか、意識すらさせないうちに、静かにあの世に旅立たれることもあるという厳しい現実、そして何もなし得ない人間の非力を感じさせた一つの出来事であったのかも知れない。

初めのころ大川さんとは、同じ教授会の構成員という以上の関係はなかったが、私が5年ほど前から短大放射線科の授業を担当するようになり、昨年春から、短大国文、英文も金曜日に玉川校舎を使用するようになって、彼もたまたまその幾つかを担当されたご縁で、毎週、多摩川の匂いのかすかに残っている小さな教員室で、お喋りをする機会にも恵まれた。そして帰宅の折、二子を通る二、三の先生と一緒に幾度か車にお乗せすることがあった。とは言っても、彼はビールはおろか、アルコールと名のつくものは一切うけつけなかったので、アルテ・リーベ、チーズケーキファクトリー、菩提樹、天一、かつ吉等、多少

なりともワインやビール、いや日本酒が無ければ味がひきたたない不幸な店は、一度も共に覗く機会には恵まれなかった。おそらく今頃彼は後悔しているのではなかろうか。亡くなる20日ほど前も、最近嗜好が変わって、紅茶をいれて飲んでるんです、と電話でそう言っていた。だから人間は時と場合によっていろいろと好みが変わるのだ、という発見をして旅立ったのかもしれない。まさかこんなにはやく逝かれるとは思ってもよらなかった。

今年の今頃、恐らく彼は誰も代ってあげることのできない苛酷な不眠不休の闘いに心身を擦り減らしておられたと想像する。俗世間的に言えば、不幸な茨の道を、ひとつひとつ乗り越える毎日であったように思う。奥さまが喘息の発作から意識が戻らなくなった、万一戻ったとしても後遺症は免れないだろうということを、彼からお聞きしたのは今年のちょうど今頃であった。金曜日になると、何らかの朗報を期待しながらも、彼と顔をあわせて言葉を交わすのが怖い感じであった。10月も終わりに近いある金曜日、3時限の始まるぎりぎりのころだったと思う。幾度か大川さんの到着を気にしていた事務の方が、お嬢さんから電話があったこと、そして川崎のほうに直ぐ電話をしてほしいと言うのであった。教員室と隣り合わせの事務室から、話を済ませて出て来られるまで、何分とかからなかった。彼は何も言はずに、授業をやめて帰りますと言った。そして急に緊張の糸が切れたように、傘立てに蹲って嗚咽する彼の姿に、私は為す術がなく、ただ己の無力を感じるばかりであった。同僚の先生に頼んで、少し遅れることを学生に伝えてもらい、二子玉川のタクシー乗り場まで彼を送り届けた。59歳でした、これから孫たちに囲まれて楽しめるときでしたのに、と彼は私の横の助手席で独り言のように言った。絶望を超えた、諦観にあふれた言葉であった。

それから一週間ばかり後の11月最初の日曜日、英語の方から連絡があった、と二群の主任が大川夫人の死を知らせて来た。彼の不幸はそれで止まらなかった。年明けて、春の彼岸に、ご霊前に何か果物でもと思い、一人暮らしの彼の神戸町での在宅の有無を確かめるために電話をかけた折り、——それは春分の日の前日だったと思う——隣りに住む彼のご姉妹の連れあいが急に亡くなられ

たというのであった。日ごろあまり信心深くない私でも、いや、だからそのような不躰な願いごとをするのか、神様、もういいかげん勘弁してください、私ども弱者への試練はこれくらいでよろしいじゃないですか、と思わず襟を正してお願いしたほどである。

その後、彼は新年度が始まって、ようやく授業のほうも軌道に乗り始めたころ、受講生の名簿を整えていて、立ち眩みがし、遠近関係が分からなくなったというのである。そして保土ヶ谷区狩場、あの箱根駅伝で名高い権田坂の近くの宮崎脳外科（彼はそう私に伝えてくれた）の診断の結果以降のことは英語科の方から公表されたとおり、われわれの共通の認識になっていた。大川さんは宮崎脳外科での、脳に腫瘍が2つ発見されたという診断のあと、精密検査のために3週間ほどの入院が予定されている、その前にもうひとつ、大学病院で診てもらいたい、そのような希望を寄せられたのが、4月22日（火）夜遅くのことであった。そして次女のかたの家からほど近い、新丸子の日本医科大付属病院に入院したと、電話をくれたのがその翌々日24日の朝8時頃だったように思う。その後の精密検査の結果は、宮崎脳外科とほぼ同じであり、胃癌からの転移であることは、本人には告知されず、ごく限られた親近者のみの胸に納められていたようである。最も活発な腫瘍を一つ切除し、一見好転するかに見えた束の間の回復に、すべての願いを掛け、祈りを捧げ、とにかく強気で、この夏の暑さを乗り切るようにと、声援を送った。しかしそれは、そもそもの根源である胃癌からの転移であるとははっきりとは知らぬ、また知りたくない者の、はかない希望の祈りであったのかもしれない。

大川さんと最後に話したのは7月28日であった。これは体調の不安定な彼を病院に見舞うのを憚り、面識のない次女の方の自宅への訪問を避けて、ささやかな見舞いの果物を送ったことへのお礼の電話であった。7月は暑くてばてたので、8月は少し体調を整えたいと思っていると彼は言った。その声の様子からは変化は感じられなかった。そしてコーヒー好きの彼のために、イタリアから入って来ているカプチーノ用の泡立器をと思い、尋ねたところ、もう彼は紅茶党に変身していたのである。今頃はもう、ふたたびお二人で、新しい生活

を営んでおられるのではなからうか。

大川先生、どうぞゆっくりお休みください。

大川先生を悼む

栗原万修

今年の夏は暑かった。夏休み中、あまり外出もせず家にとじこもっていることが多かったが、何となく大川先生のことを気になって、ある日、病氣見舞いの葉書を差し上げた。押し花をあしらった自作の葉書に、今から思えば少しのんびりしたお見舞いの言葉を書き添えた。ところが、その数日後に石原部長から電話で、大川先生が亡くなったことを知らされ、言葉を失った。まさか、という思いだった。退院されたとお聞きしていたので、急にそのような事態になるとは考えてもいなかったのである。

思い返せば、大川先生は昨年奥様を亡くされてから、心身ともにいろいろご苦勞をなされていたのであろう。でも、時折、研究室に顔を出されたときでも、笑顔を絶やさず、いつも明るくふるまっておられた。奥様のこと、お嬢さんのこと、そしてお孫さんのことなどを、いつもの口調で、いつもの笑顔で話された。ちょっと照れ臭いといったお顔で… 先生がどんなに家族思いであったかは、私にはよくわかっていた。

奥様の告別式の日、私は予定時間よりも30分ほど早く斎場に着いた。時間に遅れないように用心して少し早めに家を出たからだった。まだ、あまり人は来ていなかった。居合わせた先生にお悔やみを述べると、先生は家内に会ってくれと行って、奥様の棺のそばへ案内してくれた。安らかな、とてもきれいなお顔だった。先生のご母堂の告別式のとき、一度お会いしたことがあった。先生は大きな声で「栗原先生だよ。栗原先生が来てくれたよ。」と、いわれた。生きている人に向かって言っているように… ただ、とても大きな声だった。

たぶん先生は、大きな声でいえば奥様の耳に達すると本気に思われていたのだろう。私はそのとき、先生の奥様に対する情愛がどれほど深いものか、身にしみるように感じた。それだけに、その奥様を失った悲しみは、おそらく人一倍大きなものであったにちがいないだろう。

いや、ひょっとすると先生は、日頃から奥様のところへ一日も早く行きたいと思っておられたのかもしれない。今頃お二人は、あの世で、いつものように、にこにこ笑いながら話をされているのではないだろうか。

今はそう考えながら、早かった先生のご逝去を悼み、心からご冥福をお祈りしたいと思う。

大川先生を偲ぶ

小 川 隆

外国語部の教員として勤めはじめた最初の年、私は教職員組合の執行委員に加えられた。右も左もわからず、教職員組合と私学共済組合の別も知らぬまま、とにかくいつかはやるものだからと、因果をふくめられてのことだった。漠然たる不安を覚えていたその時、頼みに思っていたある先生が、なに、うちの部のもう一人の委員は大川先生だから心配ないよ、と私に言った。その時は、それがいったい何の慰めになるのか見当もつかなかったが、ともかくわが外国語部に大川先生なる英語の先生がおられることを知ったのは、これが最初のことであった。

それから一年、私は大川先生の庇護のもと、何とか無事にその任期を終えることができた。先生と一緒に大丈夫、といわれた言葉の偽りならざることが、つくづく身に沁みる日々であった。何かわからぬ事があると、というより何もわからなかったので、私は事あるごとに、何でもかでも先生にご相談した。そのたび先生は、あの柔和な笑みをたたえつつ、円熟した常識に裏うちされた穏

当な助言を与え、また小まめに手をかして下さった。いろいろ面倒なことも多かったが、先生のおかげで、いつもおだやかな安心を感じつつ、与えられた仕事を大過なくこなしてゆくことができたと思う。

その先生が、今はもうおられない。きちんと整えられた銀髪、和やかな笑顔、そしてポケットから取り出した小さな携帯灰皿に行儀よく灰をおさめつつ、静かに、だがいかにもうまそうに吸っておられたタバコの煙。そうした先生の拳措にたたえられていた、あの端正で温和な気分が、今、私には言いようもなくなつかしい。それは昨今、私たちの周辺から急速に失われつつあるもののように思われてならない。

大川先生への言葉

河内賢隆

たしか七月の最後の教室会議で、主任から大川先生の病状について、脳腫瘍の一つを取り除いたので快方に向って居られるとの報告を受けました。それだけに先生の突然の訃報を耳にし、全く申し上げる言葉がありません。

八月中旬の御逝去とは実に寂しいことです。日本中の各地で、いわゆる送り盆の行事をしめくくっている最中だからです。一年間離れていた亡き人との束の間のひとときを御送りする日なのです。この日に限って先生を御送りしなければならぬとは何か云い知れぬ寂しさで一杯です。あの笑顔を絶やさぬ、何か困っている時にはやさしい言葉をかけて精神的に支えて下さった先生を失ってしまったとは全く残念です。駒沢大学に着任して以来二十二年間、色々御指導をいただきました。先生には年令的に近く、酒が全く飲めず宴席などにはあまり加わらない間柄でした。さらに共通する点は駒沢に奉職する以前に定時制高校の教壇にたったことです。このことはお互いに心情を理解し合える経験です。先生の研究室にはいつもロレンスの写真が飾られていました。多分、こ

れはロレンスの人生の苦勞と勤勞学生の苦勞との何か間に重なる部分を見出していたのでしょう。これが私達に対する笑顔や学生に対する思いやりとなったのでしょう。長い間御交誼有難うございました。心から御冥福をお祈り申し上げます。

追悼 大川浩先生

市川 仁

大川先生、こうして先生の追悼文を書いていることがどういうことなのか、どうもわからないのです。「冗談はよしなさいよ」と、ため息まじりに言っている先生の声が聞こえてくるようです。私が追悼文を書くなどということを知って、「まだわかっていないんですね」と言われるかもしれません。先生は、本当はこんなものを書いてほしくはないのだと思います。おそらく、なにもしないでほっておいてほしい、というのが先生の願いなのかもしれません。でも、先生の最後に接しえなかったものとして、せめてひとことだけ、書かせてください。出過ぎたことかもしれませんが、ロレンスを愛した先生にミモザの花びらをふりかけることを許してください。

先生はロレンスをこよなく愛し、ロレンスの影の中に生きている、といった印象を私たちに与えていました。先生にとってロレンスとの出会いは衝撃的なものだったに違いありません。一人の作家が一人の人間を変えうることもある、ということを見せてくれました。先生の若き日に、それまでマーロウの研究者だった先生は、ロレンスに出会い、その時以来変わったと、そう先生はおっしゃっていました。先生の内部で大きな変化が起こったに違いありません。その風貌すらロレンスのそれを彷彿させるほどになったのですから。

先生がロレンスとともに私たちに伝えようとしていたのは、意志的な努力の空しさでした。そしてまた、なによりも先生の嫌っていたものは、自意識的な

私、そして社会的な私であったと思います。自分の姿を鏡に映してヒーロー、あるいはヒロインを演ずる人間を、ため息まじりに「そうではないんですよ」と言っていました。ですから、誰にも会わずに黙って旅立っていかれたことは理解できるのです。

先生とお会いしたのは奥様の葬儀のときが最後でした。私の中では、キャンパスで、ズボンのポケットに片手を入れ、うつむきかげんに歩いている先生の姿が消えずにいます。「やあ、おひさしぶり」と、また、どこかでお会いできるような気がしてならないのです。

大川浩先生のこと

平 林 卓 郎

大川浩先生が御病気で入院中だとお聞きしたのは、その授業の代行をしていた講師の塚本先生からでした。私が年をかなりとってから大学院（早大）へ行ってどこか講師を探していた時、駒沢大学の大川先生に紹介してくれたのが、先日六十一才の若さで亡くなった大東文化大学の（駒沢大学で当時講師もしていた）吉原二三男先生でした。

吉原先生をお願いして大川先生に講師として採用していただくために大川先生にお会いしに行く時、大川先生という方はどういう方ですかとお聞きしましたところ、「親切な方だけど大変ユニークな人だよ」とお伺いしました。面接する人間にとって、「ユニークな人だよ。」という言葉ほど苦手な言葉はないのではないのでしょうか。お会いした大川先生はかなり猫背な方でした。そして大のコーヒー好きであることも解りました。その頃の私はコーヒーはあまり好きではなかったので二杯目は日本茶をいただきました。大川先生は私と全く違ってお酒を飲まずコーヒー専門のようでした。

先生は学部は早稲田を出て大学院は明治学院大学へ行かれたようですが、私

としては学部時代の先輩として先生にいつでも敬意を持っておりました。

駒沢大学の講師として採用していただいて、一年ほどしてから愛知学院大学で専任を募集しているから行って見ないかというお電話がかかって参りました。全く見も知らぬ名古屋の大学に私が通うようになったのはそのような事情からです。それから七年を経て私は東京近郊の短大に戻って来たのですが、正式に大川先生に御挨拶に行くのも忘れていたような始末でした。大川先生に最後にお目にかかったのは大川先生とは同僚の岸本先生から丸子哲雄先生の出版記念会に出て見ないかというお誘いを受けた時です。久しぶりにお話をし、長の御無沙汰をお詫びした次第です。すでに述べましたようにお酒を飲めない先生は会の途中で中座されましたが、帰られる時私の肩をぽんとたたかれて「がんばれよ」と一言言われて帰ってゆかれました。D. H. ローレンスが研究テーマであった先生としてはまだ仕残したお仕事が沢山あるかと思えば、大変残念なことだと思わざるを得ません。先生も私同様病院が大嫌いであったろうと推測いたしておりますが、その苦痛から解放されたということが今の私にとってはせめてもの慰めなのであります。

In Memoriam

岸 本 茂 和

思いもかけぬ報せというわけではなかった。

腫瘍がふたつ脳にあるらしいので検査入院しなければならなくなったと先生から聞かされたとき、芝生に伸びるあの長い影が日の陰りを知らせるように、なにかしらいいようもない暗鬱な予感がふっとおそったのだったから。奥さまが亡くなられて一周忌の法要もまだ営まれていないというのに、そんなことがあるものかという思いと、腫瘍といえおそろしい《蟹》が跳梁する病だから、ひょっとしたらそんなこともあるかもしれぬという諦念に似た思いが、同時に、

去来していたようにもおもう。

大学が夏期休暇にはいるまえ私たちは、ひとつの腫瘍の切除が成功し、術後の経過も良好で、安定した回復期にはいっておいでだという話をきいていた。秋の風が吹きはじめて、季節がよくなるころになれば、もうひとつの腫瘍を《退治》することになるだろう、ということもきいていた。と同時に、たれにもかたることはしなかったけれど、その病状がけっして予断をゆるす状況ではないことも個人的には伝え聞いていた。そうこうするうち、ことしの夏の暑さに、すすんでいた食もほそくなり、背中に痛みをおぼえることがあるらしいということが伝えられた。したのお嬢さんのお家で術後の身を養っておいででは、しかし、お見舞いにゆくにもはばかりがある。どうしようかしらん。

暑さがいよいよますますにつれ、時間だけはゆっくりと、だが、容赦なく流れつづけていた。そのころわたしは、先生の入院を契機にとつぜんあいてしまった仕事上の穴をうめるために担当することになった、大学でもっとも重要な行事にかんする《おもたい仕事》をこなすのに頭をなやましていたが、そんなやさきだった、再入院されたと伝えられ、そしてその数日あと、唐突にけさ亡くなられたという訃報にせったのは、追いかけるように、通夜・葬儀は故人のご遺志で執り行わない、ご供花・ご芳志の儀もひかえられるべしとの連絡がはいった。弔問もゆるされならしいが、故人の遺志はあくまでも尊重されなければならぬ。

一年もたたぬ内にご両親をうしなわれたふたりのお嬢さんのあまりにも大きすぎる悲しみは推察するにあまりあるけれど、さきに暗鬱な予感を感じていたとは雖も、わたしにとってもそれは、不慮の喪失感と、われをもふくむひとの死を認識させる鉄槌のごときもの—Memento Mori—であることに、相違はなかった。

ふりあげた哀しみと喪失のこぼしをどうおろせばよいのか。鬱懷をはらうためにできることはたったひとつしかなかった。たまたま研究室に居合わせたN教授をさそい、そしてT教授をよびだし、わたしたちはその晩めずらしく、痛飲することをみずからに強いることにしたのだった。それがわたしたちなりの、

亡くなった先生への通夜であり、告別の儀式だった。

そのとき口にはださなかったけれど、ひとがひとの死に際会して、そのひとがそのひとの棺に投ずべき花の数にはもってうまれた限りがあり、奥さまに先立たれ、奥さまをうしなわれてからずっと、先生の身辺にただよっていたあのただならぬほどの痛々しさからさっすれば、きっと先生は、もてるかぎりのその花を、奥さまが亡くなられたときにぜんぶ投じてしまわれたにちがいない、もう先生には投げいれるべきいっぽんの花も残っていなかったにちがいないと、ようやく酒精に濁りかけたわたしの頭が、ふしぎに武断的に、そうきめつけていたことを、いまもはっきりと記憶している。

大川 浩先生の御逝去を悼む

田 中 保

大川先生が亡くなられた、との知らせを電話で受けた私にとって、ただ驚き入るばかりでした。五月に精密検査のために入院され、手術をすることになったが、手術後の経過もよく、もう一度他の箇所を手術するために再入院の予定であるが、退院なされたと同っていましたので、お元気な顔を見られるのも間近いものと心待ちにしていた矢先に、八月十八日、入院先の日本医科大学付属第二病院で不帰の人となってしまわれたとお聞きし、私自身の耳を疑うほどでした。

先生とは、私が昭和四十八年四月から駒澤大学の専任としてお世話になる以前から同人「近代文学語学研究会」を通じて親しくご交誼を頂いておりましたから実に三十年近くになるかと思えます。先生はアルコール類は一口たりとも飲まず、否、先生曰く、体が受け付けず、専らコーヒー党でありましたが、あるとき、昨年（平成八年四月）退職なさいました山縣先生、小生共々渋谷道玄坂界限へ夜の社会勉強にとご一緒して、先生は終始オレンジ・ジュースで文

学談義に加わり話に花を添えて下さいましたことがありました。私は美酒に酔い、お話しに陶醉したのを昨日のように思いだされます。先生は英文学がご専門でしたが、特に十九世紀の小説家であり、詩人でもある D.H. Lawrence 研究を長年にわたってなさっていましたが、先生のロレンス講義を受講して、卒業していった多くの卒業生が、先生の独特の語り口の名講義を決して忘れることはないでしょう。

先生は、学内にあっては、英語科の主任・外国語部長の要職も歴任されましたが、元来は、学生とコーヒーでも飲みながらロレンス論でも語って自分自身の時間を過ごしたかったのではないのでしょうか。昨年十一月に最愛の奥様に先立たれてからは、肩をがっくり落とされて歩くお姿に、お言葉をおかけするのも控え目になってしまい、今、思うに、遠慮せず、先生の文談をもっともお聞きしておけばと悔やまれます。ご冥福をお祈りいたします。

思い出ずるままに

短大英文科

熊 崎 久 子

7月12日夜、ご長女から、5月16日の手術後の細胞検査の結果、先生は胃癌の末期でご生存はあと3ヶ月位と診断されたとお聞きし、唯呆然とし、体中の力が抜けてしまいました。ご入院中も一時退院された後も普段とそれほど変わられたとは思いませんでした。その後も電話を通してはお変わりないお声をお聞きできましたが、あの時以後、時が刻まれるのが恐ろしい日々が続きました。そして8月上旬、シエナで求めた、エトルリア人墳墓の壁画の写真が載ったカレンダーを持って病室をお訪ねした日。12枚の壁画が先生の心身にもう一度潤いと活力を与えてくれると信じて。比較のお元気に見えた先生は、しかし、いつものような感動を見せてはくださらず、こちらの言葉に頷かれるだけでし

た。私も参加させていただき、清水先生ともども4年前に出された「ロレンスのエトルリア紀行」ご執筆の折りに、エトルリア人の壁画には大変な情熱を傾けておられたことを思い、胸つまる思いで病院を後にしました。感動のほとばしりも奪ってしまう程、病状は予断を許さなくなっているのだと思い知らされました。

先生のD. H. ロレンスへの傾倒振りは多方の知るところではありますが、それは単なるご研究のテーマとしてではなく、ロレンスとの巡り会いそのものが先生にとっては何か運命的なものとなり、その後の生き方に大きな転機をもたらし、ご自身、内奥の深いところではロレンスと一体感を持ち続けておられたのだと思います。

1969年4月、私たち3人（大川、清水両先生と私）は共に駒沢大学に専任教員として採用になり、初めて言葉を交わしました。うたかたのように過ぎてしまった28年前の春の、見事な白髪とダンディな装いの先生のお姿が今も目前に彷彿いたします。くしくも私たちは大学院以来、C. マーローを研究テーマとしておりました。しかし間もなく先生は宗教その他の問題で苦悩され、精神的な葛藤をもたれた時期を経、ロレンスと遭遇され、道を拓かれたとのことです。先生はロレンスとの出会いについて述べておられます；“ロレンスとの出会い——それは自分自身の知性意識のために窒息寸前になっていた人格存在が根底から覆され、完膚なき迄うちめされて暗黒と混沌のなかを彷徨していた時に、ふと虚空を見上げるとそこにロレンスが居たのだ。…以来、小賢かしい知性意識の次元では到底予測され難かったこの必然の出会いの重要さを噛みしめつつ、私のロレンゾオが、現代人の病的で、錯乱している意識態度を、その磨き澄まされた作家魂で、奥底まで追いつめあばき出す姿勢に驚嘆し、啞然としつつも毎日が思考の冒険となり、意識の新しい領域への探求の旅路となり、ロレンスとの出会いの驚異の日々となって来ている”（「文明とタブー」へのはしがき）。

以後、先生はロレンスの多くの作品に取り組みられ、論文を書かれ、翻訳を試み、また注釈書を出されることになります。手探りでロレンスの世界に迷い込

み、躊躇する私をご鞭撻くださり、暑い夏休みの日々を3人で作品解説をしながら過ごした年々のことが胸を過ぎります。「勉強会」などと称し、熱いラーメンを食べながら、気ままに、心赴くままに、が先生流でした。ロレンスが新約聖書の中に紛れ込み混沌の世界を繰り広げる「黙示録」の解明を試みている「アポカリプス」はかなり難解な作品で、先生はデューラー描くところの「黙示録の騎士」を持ち込まれ、解釈の端緒を求めるといったこともあり、先生の文献探索の緻密さ、敏速さは見事なものでした。参考文献はたちまちの内に手に入れてこれらました。美術書であれ、植物図鑑であれ、必要な書物は先生に声をかければ、必ず見付かったといっても過言ではないと思います。新刊がなければ古本といった具合でした。休日には、よく打ち連れて小川町、神保町など、本屋街を歩きました。御茶ノ水駅からだらだらと坂を下り、時には途中の古本屋に足を止めながら、三省堂にまず立ち寄り、新刊書を眺め、洋書から和書へというのがお決まりのコース。それから北沢書店まで、あちらに寄り、こちらに寄りしながら、ゆっくり、ゆっくり当てもなくといった風情で歩くのです。3人それぞれが手に入れた書籍を抱え、コーヒー・ショップで雑談を楽しむ、しばしば、丸善にもでかけました。ここでも洋書売り場から始め、和書、文庫本と廻り、文房具売り場にもゆっくり時間をかけます。万年筆にもなかなかうるさい方でした。モンブランなどお好みの銘柄品を丹念にご覧になっておられました。日本橋ではルノアールで一休みというパターンだったと思います。

また、先生は人も知るコーヒー好き、この度も入院された当初からコーヒーのセットが枕もとに置かれてありました。体調の異常に気付かれた前後から紅茶もよく嗜まれるようになっておられましたが、食事にせよ、コーヒーにせよ、食べ物や飲み物の味もさりながら、その店の雰囲気を変えたいという方でした。お気に入りの店のはっきり決まっておき、すこしでも意に添わないことがあれば、訪れないといったところがありました。お気に入りの店で収集されたマッチもかなりの量となり、いずれラベルを整理し面白いものに仕上げるとのご意向でした。また、講義用のテキストなど、本文、注釈を入れ、表紙、本文中に

お好きなイラストを入れるなどして、手作りの製本までこなし、楽しんでおられました。先生のご好嫌の感情はかなりはっきりしたもので、すべての事柄に関して、芸術、文学、宗教、その他あらゆる事物、人間に対峙するに当たって、一つの揺るぎない意志をもっておられました。いみじくも先生が評しておられます様に、文壇の異端児視されながら、‘自分を取り巻く人間、動物、自然の山川草木、太陽や月、四季を織りなす宇宙のリズムとの暖かい血液の交流を理念とし、弧高の生き方を貫いた’ ロレンスさながらの生き方をさりげなく実践されたのです。研究室の机の前の壁に、樹々の茂る小高い山腹の大木の根元に腰をおろし、膝を立てて寄り掛かるロレンスの写真が架けてありましたが、先生はこの静かな映像の中にロレンスの百万言をお聞きになっておられたのでしよう。

思えば、先生は日常生活のあらゆる面で自分流のダンディズムを貫かれた方でもありました。趣向、言動、総てにおいてそうでした。小柄ながら瀟洒な装い、柄もののワイシャツ、和服地仕立てのネクタイ、カバン類も交友のあった工房を通し、いずれもオーダーメイドの大川ブランドでした。ヘビー・スモーカー、無類のコーヒー党で、コーヒー・カップにもなかなかうるさく、陶芸展にもよく出かけられじっくり吟味をされ、購入なさっていました。ちなみに晩年の先生は陶芸教室に通い初めておられたとのことで、奥様やご自分の骨壺もいずれ自分で焼くと言っておられたことも思い起こされます。

辛口のご発言、いささか偽悪めいた口調などの表側とは異なり、内面は非常にナイーヴな神経と優しいお気持ちの持ち主で、また大変な愛妻家でもありました。喘息の持病がおありだった奥様のため、日頃からお心を碎いておられました。昨年11月1日にまだお若かったその奥様が急逝され、悲嘆と失意の中に落ち込まれておられました。通夜の夜、人気の消えた祭壇で一人ぼつんと奥様のご遺体を見詰めておられた先生、お声をかける術もありませんでした。それから半年近くが過ぎ、お気持ちの整理もつかれた先生と再び本屋廻りを始めようとしていた矢先の4月19日深夜、体調の不調に気付かれ救急病院に行かれたのを発端に4月25日、日本医科大学病院に検査入院となり、息をつく

間もない速さで8月18日を迎えてしまいました。『0時10分、ご臨終です』医師の声が抑揚もなく流れて、すべてが無に帰しました。しかし先生は半年の間、この時をずっと待っておられたのかもしれませんが。奥様の許へ行かれ、ほっとなさっておられることと思います。

30年近い年月の間、先生は私にとり、師のような存在であり、良き相談相手であり、いわば戦友のような方でもありました。能登の祖院での夏期研修、藤村を偲んでの馬籠への旅、そして1研6階の‘特別室’で入れて頂いた甘味の効いたコーヒー、立ちこめた煙草のけむり、数々の思い出を遺されて先生は旅立たれてしまいました、奥様の待たれるところへ。悠久の流れの中へ。安らかにお休みください。

よわ 夜半のあらし

清水 祐 次

長年にわたって敬愛し、心頼みにしてきた小林・山県両先生が相次いでお辞めになられて、私の身边にも俄かに晩秋の気配が迫る感があった。その頃の日、お茶を飲みながら大川先生と話したことがある。

「今度はぼくの番ですからね。精いっぱい褒めて書いてくださいよ。先生だけが頼りなんだから」

などと私は軽口をたたいた。勿論、論集の「おくる言葉」のことである。

偉大な先輩両先生とは比較にならぬ、人望も存在感も希薄な私のこと故、万が一にも記念号が出ると仮定しての話だが、その時には少なくとも大川先生は、心のこもった餞けの言葉を私のために書いて下さるだろうということは、私の中では言わば既定の事実となっていた。

およそ人の世に常無きことは、駒沢人の端くれとしても一応心得てはいたつもりである。とはいえ、日頃心を許しあう友として、「明日ありと思う心」を

互いに持ちあうこともあながち責められまい。まさか先生への送別の辞を、私の側から、このような形で、しかもこんなに早く書くことになろうとは、夢にも思えぬことであった。

「先生、それはないですよ、約束が違うじゃありませんか」

私はやり場のない嘆きを胸の中でかみしめつつ、この小文を綴っている。

人の出会いには、ある不可思議なみほとけの縁を思わざるをえない。私には旧制中学入学の日、帰り道で初めて言葉をかわして意気投合し、爾後五十余年にわたって変わらぬ親交を重ねる友人がいるけれど、大川先生との場合もこれと良く似ている。

学園紛争さなかの四月初旬の一日、大学会館二階の部屋で総長から辞令を手渡されたあと、会館出口で大川先生から声を掛けられた。その日一緒に採用された短大所属の熊崎先生と三人でお茶でも飲みましょう、ということになり、たしかロマンあたりでくつろぎながら、初対面の挨拶を交わしあった。

先生はその時分から白髪が目立っていたので、私よりずっと年配だとばかり思い込んでいたところ、私よりお若いと知って内心驚いた記憶がある。とはいっても三人は年齢が二年とは離れぬ昭和一けた生まれの同世代で、以後奇しきご縁が三十年近くも続くことになる。

先生と私とでは、性格や好みなどむしろ異なる面の方が多いかもしれない。思いつく些細な点からあげれば、私がかんりの犬好きなのに対して先生は猫派である。それと幾分関係があるのかどうか、私は暑がりなのに先生は相当な寒がり屋で、私がかんる汗ばんでいるような日に、先生の部屋には暖房が入っていたりすることも珍しくなかった。私は身なりに無頓着だが先生はおしゃれで身嗜みがよく、真夏でも背広ネクタイを涼しげに着こなしておられた。また、先生は食物にも人にも好き嫌いがはっきりしており、自己を偽らず決断も速かった。何事にも適当で優柔不断な私とは対照的である。

このような反面、私の目からはとても貴重に思える類似点が私達にはあった。車の運転がだめ、飛行機もパソコンの類もすべてだめという超時代遅れの上に、

集団・組織になじめず議論や会議は苦手、酒も飲めないなど、いささか社交性に欠けるところが我々にはあったが、このようなネガティブな面での共通性が、同世代の生まれということと相俟って、我々の思考、行動の分野に類似した方向性と限界とを付与することになり、ひいては二人のうまが合う原因ともなっていたのではないかという気がする。

酒の代わりにというべきか、先生は大のコーヒー好きで、以後私までいつしか、先生の入れて下さるコーヒーを心待ちにするようになっていた。学会の帰り、或いは期末の休みを利用して、先生としばしば小旅行を試みるのが毎年の恒例となっていたが、どこの町へ行っても必ず真っ先に訪れるのは喫茶店である。先生には独特の嗅覚のようなものがあって、初めての町の裏通りなど歩きながら、雰囲気の良い店を立ちどころに見つけ出してしまうのであった。

特殊な嗅覚は持ちながらも、先生は全くの方向音痴（三重県が山陰にあり、石川県が九州にあると思い込んでいた！）であったから、旅行の行き先やコースの選定は専ら私に任されていた。従ってこの分野ではいつも私の好みが一方的に優先される結果となった。

ある時はさいはての海辺の町、ある時は奥深い山あいの一軒宿、またある時は沖合に浮かぶ離れ小島といった具合に、人の余り行かない、自分も行ったことのない無名の土地を、思い付きで勝手に選ぶ傾向が私にはあったが、先生はそのような気紛れな偏った選択にも、苦情めいたことは一切言われなかった。見栄を張らずスケジュールに縛られない、行雲流水の気ままな旅を好む点でも、私たちはとても気が合っていたのである。

孤島と言えば、後々まで二人の思い出し笑いの種になった出来事がある。内海の小島から本州へ帰るはずの船が港へ着いたとき、何か様子がおかしい。降りてみるとそこは何と四国だったのである。私自身にしても狐につままれたような心地であったが、それまで絶対的であった私の方向感覚に対する大川先生の信頼が、以後にわかに揺らぎ始めたのは言うまでもない。

雑談の合間など旅のつれづれに、それぞれ持参の本を読むことも多かった。こんな場合には自然肩のこらないものが選ばれるわけだが、互いに好みの本を

教え合ったりもした。ある時私が吉村昭を推奨すると、先生からは藤沢周平を勧められた。奇妙なもので、以後私も周平の熱心な愛読者となったし、先生も吉村の新刊が出るたびに買って読んでおられた。

みぞれ降る石狩の野の汽車に読みし ツルゲエネフの物語かな

という啄木の歌は、車窓に凭れて文庫本に読みふけるひとときの、安らぎ寛いだ先生の面影を彷彿と蘇えらせてくれる。

初めて降り立った田舎町の、鄙びた喫茶店の片隅に先生と向かい合って、見知らぬ通りの人の往来をぼんやりと眺めては、一期一会の感慨に耽った過ぎし日々のが、今は限りなく懐かしい思い出となっている。

勿論旅行の折りだけでなく、大学からの帰り道とか、熊崎先生を交えてのミニ懇親会の待ち合わせ、休日の書店めぐりでの足休めなど、喫茶店に立ち寄る口実にはこと欠かなかった。

自由が丘の駅前に先生とよく入った店がある。座る場所はいつも決まっていて、二階の窓際の私の席からは、駅舎の上にある駅名の看板の右半分、つまり「が丘」の二文字だけが見えるのであった。先生と話しているとき、何となくそこに目が行くことがある。そんな時、私はいつも無意識のうちにブロンテの「嵐が丘」を脳裏に浮かべていた。

先日心の寂しさに耐えきれず、一人でその店に立ち寄ってみた。窓越しにその文字を見つめているとき、ヒースのおい繁る荒野の上を吹き過ぎて行く夜半の嵐の響きが、私の耳にはっきりと聞こえてくるような思いがした。

先生のご遺志によってひっそりと簡素に行われた野辺の送りは、面倒で煩わしいことのお嫌いな先生にいかにもふさわしい、ある種の清々しさを感じさせるものがあった。

市から派遣されたバスは、下町風に細く長々と続く商店街を通り抜け、山の手の坂道を折れ曲がりながら市営斎場めざして登って行った。突然眼前の視野が開けて、遥かに横浜の海を望む丘の上に出た。

そのとき私は、先生が愛してやまなかったDHロレンスの、妻と少数の友人に見守られた、素朴で心温まる埋葬の日の情景をふと思い起こしていた。親愛

なる先生との最後のお別れの場所が、私の目には薄日の差す地中海を眼下に見晴らすヴァンスの丘と重なり合っていた。

万感を胸のうちにのみ込みながら、私はやっとの思いで先生にお別れの一言をささやきかけた。

「さよなら、大川先生」

ふるき良き友喪へり夏の陽の
翳りし庭に法師蝉啼く